
お寒いのが好き

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お寒いのが好き

【Nコード】

N8725T

【作者名】

河野　る宇

【あらすじ】

＊なんかもう……色々ありすぎて分かんない。
とりあえず、ゆっくりらせてください。

※小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

＊空は鈍色―そらはにびいろ―

「……」

20代後半の青年は、とある一軒の家の前に立っていた。彼の名は向井 時弥^{むかい ときや}、自衛隊員である。年末年始の休みをもらい実家に帰ってきたという訳だ。

どうして彼が家に入るのを躊躇するのか――姉がいるからだ。休みになると弟である彼を連れ回し荷物持ちから雑用までさせる。

数年前に結婚した姉の茜は親よりも彼をこき使う。彼の道筋を決めてきたのは全て姉だ。それが苦痛という訳でもないのだが、今度はどんな事を言い渡されるのか……その点が注目である。

さして重たくもない足取りで一般的な家庭の門を開き鍵を差し入れてドアを開く。時刻は昼少し前……ドアを開くと年末らしいテレビの音が微かに耳に聞こえてくる。

実家への土産と少しの荷物を抱えてリビングに向かうと、そこにいた3人の目が一斉に時弥に注がれた。

「あら、時弥。おかえり」

「またたくましくなったな」

「そんなにすぐにたくましくなるワケ無いでしょ父さん」

皆それぞれに彼に声をかける。

「ただいま」

立ち上がった母親に土産を渡しながら発した。

「行くよ」

まだ腰すら落としていない時弥に茜は立ち上がり荷物を半ば奪うようにして床に投げ置いた。

「……どこに」

「この大晦日にまだ開いてる店があるの。バーゲンしてるから付き合いなさい」

茜はそのために昨年産まれたばかりの娘を夫と向こうの家族に預

けたのだ。愛情が無い訳ではない。

この時を逃さないために預けたのだが、ことのほか向こうの家族もそれを楽しみにしていた。こちらの実家よりご主人さんの実家の方が遠いためだろう。

とにかく帰って早々に時弥は出かけるハメになった。

*壮絶なるバトル

時弥のジープではなく実家のワンボックスカーを転がし、いざ都心へ——姉は事前に調べていた店を携帯で確認し、先に車から降りて店に向かう。

買い物している間に時弥が駐車場を探して駐めるといふ流れだ。今回はいつもより早く見つけられたので姉が言っていた店に向かった。

「……」

こういう時の女性は近寄りがたい。

この時に賭けた気迫というものが全身から漂っていて、なんともコメントのしようがないのだ。

だが、姉の茜はそんな戦場から颯爽さっそうと抜け出てきて両手にショッパ―をいくつも抱えていた。

爽やかな風に艶のある肩までの黒髪をなびかせ笑みを浮かべている姉に近づきショッパ―を受け取る。

姉は女の戦場でも冷静に軽やかに駆け抜けてお目当てのアイテムを手にする。額の汗は戦った跡ではなく、店内の暑さのためだ。

まるで冷酷な殺し屋のように不敵に笑い、この寒空の中オープンカフェの椅子に腰掛けた。

時弥は荷物を椅子に置いて店内に入り注文を済ませて姉の元に戻る——

「！」

すると知らない青年たちが睨みを利かせながらこちらに歩いてくるではないか。

「？」

初めてお目にかかる面々に時弥は首をかしげたが、目の前に来る頃にはなんとなく察しが付いていた。

店を出て姉の方に顔を向けた時、彼女と彼らが何やら話していた

事を思い出す。彼女の足下にはタバコの吸い殻らしき物体……このエリアは喫煙禁止区域だ。

姉はタバコを吸っていた彼らに近づき毒づいたのだろう。

「注意した」と言えば正義感からだとも感じられるが、彼女は穏便な言い方はしていないと時弥は考える。

そして出てきた時弥を指さしこう言った――

「文句があるなら今出てきた男を倒してから言いなさい」

うん、きつとそうだ。

時弥は1人納得して自分の目の前で立ち止まったやや背の高い青年を少し見上げた。

「俺に何か用？」

「……」

無言の威嚇で男たちは見下ろす。

1人がぴくりと動くと、姉がすかさずどちらの援護をしたいのか解らない言葉を投げかけた。

「時弥は自衛隊員だよ」

「!？」

男たちの表情が一瞬で曇る。

「……」

いや、あのね……そう聞けば確かに相手は躊躇するかもしれませんがけどお姉さん。こっちは公務員なのでむやみに手を出せない事もバレちゃうじゃありませんか。生憎と休暇中だから公務執行妨害もきかないしだね。

童顔で自分たちよりも小柄な時弥に怪訝な表情を浮かべる青年たち。いや、もしかすると少年かもしれない……なんとなく未成年のような感覚がある。

「いいからぶつちめてやりなさいよ」

こっちの立場も解って姉さん。

「! あ」

当惑している時弥の前方20mほどに見知った顔――天の助けだ

！ と彼は足早にその人物に駆け寄った。

「おい杜斗^{もりと}！」

「？」

男は声の方に振り向く。

緑のフライトジャケットにブラウンのカーゴパンツがよく似合う大柄の青年は駆けてくる時弥を見て眉をひそめた。

「……」

時弥の後ろから質^{たち}の悪そうな連中も来ているが……とさらに眉間のしわを深くする。

「こんな所で会うなんて奇遇だねえ」

「そうだな」

「待てよコラ！」

「逃げるつもりか？」

見た目も頭の悪そうな連中を杜斗と呼ばれた青年はギロリと睨み付けた。

「……っ」

185? から放たれる威圧感は尋常じゃないほど効果的に青年たちを黙らせた。

「彼も自衛隊員ね」

「！ おい……」

仲間のように言われて杜斗はなんとなくムツとする。

男たちはさすがに自衛隊員を2人相手にするのは無理だと判断したのか、舌打ちして去っていった。

「やゝ助かった」

「なんなんだよ」

「誰？」

姉が杜斗を見上げる。

「あ、俺の同期で八尾^{やお} 杜斗^{もりと}っていうんだ」

「へえ……」

「俺の姉さん」

と今度は杜斗に姉を紹介する。

「どうも」

「こんにちは、時弥の姉の世良 茜です。いつも弟がお世話になってます」

名字が違う事で姉は既婚者なのだと察した。

「やるじゃん」

「……なにが」

杜斗を見て茜が時弥に肘を打つ。まるで可愛い彼女を見つけた相手にするような言動に2人は当惑した。

「とりあえず助かったよ」

「ああ」

何がどういう事なのかさっぱり解らない杜斗だが、詳しく聞くような事でもなさそうだったのでそのまま別れる。

*姉の妄想

「彼カッコイイわね」

「え？ ああ、うん。そうだね」

家への帰路、車の中で姉が助手席で発する。

「よくあんなカッコイイの捉まえたわね」

「……偶然だよ」

どうも姉の言い回しは首をひねるものがあるがスルーした。

「で、どこまでいったの？」

「!？」

予想だになかった問いかけにハンドルをとられて危うく事故りそうになった。

「ちよつと！ 危ないじゃない！」

「ご、ごめん……そんなこと言うから」

「あら、違うの？」

「姉さんは俺を変態にしたいのかい」

「可愛い弟を変な女に取られるくらいなら彼のような男性に寝取られた方がいいわ」

「どういう論理？」

さらりと今とんでもないこと言ったね姉さん……時弥は呆れて溜息を吐き出した。寒い冬空に心まで寒くなったような気がして生ぬるい笑みを浮かべる。

家に到着し、時弥はようやく落ち着く事が出来た。リビングでこたつに潜り込みバラエティ番組のかかっている液晶テレビを眺める。こたつの上に置かれているみかんに手を伸ばし皮を剥くと、無言で向かいにいた父が手を差し出した。

「……」

時弥はその手に皮を剥いたみかんを乗せて再びみかんを手に取り。年末らしい時間を過ごしカウントダウンの様子をテレビで見つめ

て年を越えたと家族で「あけましておめでとうございます」と挨拶を交わした。

「行くよ」

おもむろに姉が立ち上がり時弥を見下ろす。

「行くって……どこに」

「初詣」

「こんな時間から？」

「こんな時間だからでしょ」

茜は白いコートを着こんで時弥のオーバーをハンガーから外し手渡す。

「……」

相変わらず俺に選択権は無いのね。と小さく溜息を吐いてオーバーを受け取り立ち上がった。

*あけまして

車で30分の所にある神社に向かう。

神社近くの広めの道路に駐めて街頭の灯りを頼りに歩いていくと、初詣に行く人たちと合流する。到着するとすでに人は大勢いて賑やかな音が響いていた。

「目当ては破魔矢とおみくじよ」

言って時弥の腕をグイと引き寄せる。

「わ!？　ちよっと姉さん……ま……っ」

顔を上げた時——目の前に人がいて見上げた。

「……」

「……」

お互いに見知った顔だ。

「……あけましておめでとう」

「今年もよろしくな……」

「!　あら、杜斗くんだったけ」

茜の強引な説得に杜斗は仕方なく行動を共にする事になった。

「まさかこんな所で出会うなんてねえ、まさに運命の相手よね!」

「なんの話だ？」

「……気にしないで」

時弥は頭を抱えた。

賽銭箱の前に立つと自然と神妙な面持ちになるから不思議だ。

「作法どんなだったっけ」

「神社によっても違うだろ」

「まあいいや……」

2人は二礼二拍手して手を合わせ目を閉じる。祈りが終わり再度一礼をした。姉の破魔矢の購入を待ちおみくじの列に並ぶ。

「俺、去年は末吉だったんだよね」

「俺は中吉だった」

「あたしは大吉だったわ」

今年の運勢を占ううえではとても重要な儀式だ。

3人は慎重におみくじを引いた。

「あゝ今年は中吉か。残念」

茜は不満げに発する。

「……杜斗は？」

時弥は自分のおみくじをチラリと見て杜斗に問いかけた。

「大吉」

「時弥は？」

茜は弟のおみくじをのぞき込んだ。

「あら、大吉じゃない」

羨ましそうに2人の手元を見つめる。

「なんて書いてるの？」

「失せ物、しばらくすれば見つかる」

「なんでそこ言うのよ」

「や、なんとなくこの項目って不思議と先に目が行かない？」

「そんなそこはいいから恋愛のそこ見せなさい」

茜は苛ついて時弥の手からおみくじを奪い取った。

「……」

内容を読み時弥と杜斗を交互に見やる。

「やっぱり運命の相手ね」

「言うと思ったよ」

返されるおみくじをげんなりした表情で受け取った。

おみくじに書かれていた恋愛運は……『すぐ近くにいる。逃がし

てはならない』

時弥は薄笑いを浮かべて心の中で涙を流す。しかし他の項目はとも良い事が書かれているので持ち帰る事にした。

「……」

それを見ていた杜斗の顔が険しい。

「え、なに？」

「まだサイフに入れてるのか」

「あ……買うタイミング逸しちゃって」

サイフにチラリと見えた自衛隊員の証明書は大半の者が専用パスケースを購入しそこに入れている。

杜斗もちゃんとパスケースに入れて持ち歩いていた。

「！」

苦笑いを浮かべて頭をポリポリとかく時弥の視界に、木に向かう姉の姿が映る。

「中身が気に入らなかったの？」

「そうよ」

木に結びつけ再びおみくじを引きに行った。

「何度でも引いて良いものなのか？」

「うん。自分が良いと思うまでやっていいものなんだってさ」

持ち帰るおみくじは時々、取り出して中身を読み返すことが良いとされている。そうする事で注意や気を引き締める効果があるのだそう。

「ん、まあこれでいいわ」

3回目でようやく納得したおみくじが引けたらしい。時弥たちは親への土産としてベビーカーを買った杜斗と別れた。

*オチ？

「やっぱ運命の相手だって！」

「友だちという意味ではそうかもね」

車の中で茜が嬉しそうに声を上げて時弥がなだめる。家に到着する
とさすがに眠くて時弥は歯を磨きすぐに寢床に潜り込んだ。

初夢は2日目の朝だというから今日の夢はただの夢だろう。

今日はなんだか色々と散々な日だった気がする……いや、正しくは昨日になるのかな？ 考えたら今は早朝だ。そんな事を考えながら意識を遠ざけた。

「おはよう。あら、どうしたの？」

昼過ぎに起きてきた茜がこたつで突っ伏している時弥を見下ろす。

「……なんでもない」

酷い夢を見て気分が悪いとは口が裂けても言えなかった。内容が
内容なだけに……

なんだって俺が杜斗を襲わなきゃならないんだよ。思い出した
だけで鳥肌が立つ。そもそも体格的にいつて俺が適う訳ないし、だか
らって逆の夢も嫌だけど……と訳の解らない思考が頭の中で渦巻い
た。

「あ、雪よ」

「！」

茜が嬉しそうに窓の外を指さした。立ち上がって窓に近づく。

音もなく降りてくる白い妖精——空は鈍色だが静まりかえった風
景は切り取られた絵画のようで時弥は目を細めた。

こんな年越しもいいかもしれない。窓ガラスから放たれる外の冷
気が肌に伝わり室内に目を向けた。

「……」

俺はここにいる。

ここがあったから俺は今ここにいるんだよな。

「時弥、おせち食べたら出かけるよ」

「ええっ!？」

時弥は逃げ出したい衝動にかられた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8725t/>

お寒いのが好き

2011年8月30日03時24分発行